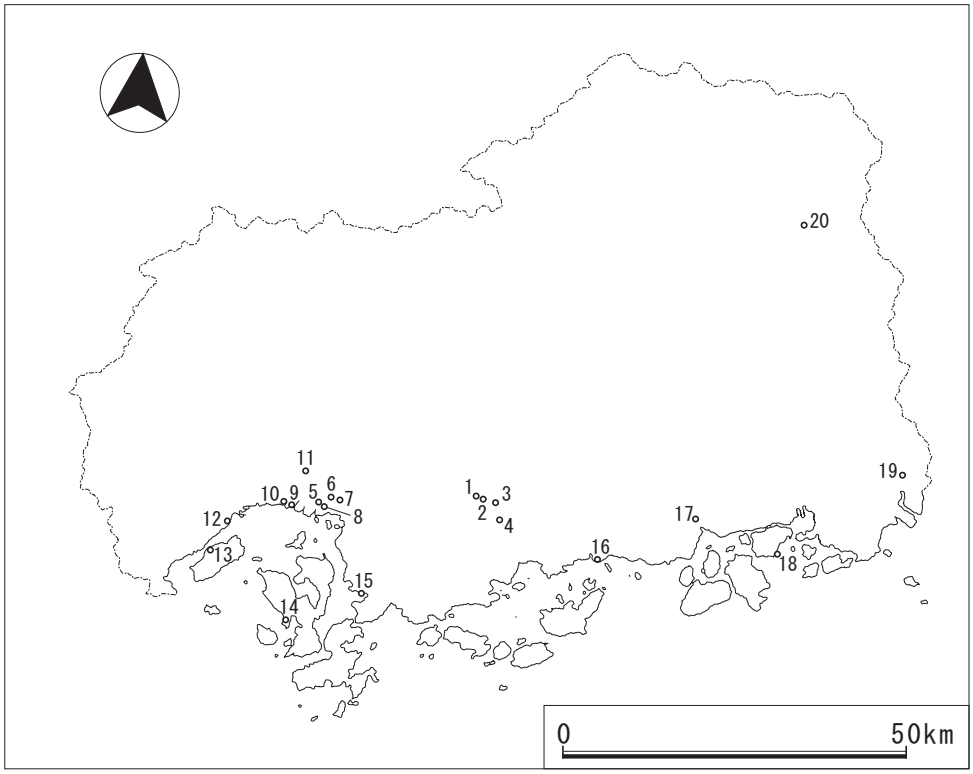
開発に伴う協議と立会・試掘・発掘調査の概要（2011 年度）

1．はじめに

広島大学が所管する施設所在地は、本部キャンパスが位置する東広島市および統合移転する以前に本部キャンパスなどが所在した広島市を中心に広島県各地に分散しており、合計 28 ヶ所を数える（大学・附属学校校舎等を中心とする敷地 7 ヶ所、研究所等施設敷地 8 ヶ所、課外活動施設敷地 5 ヶ所、職員宿舎敷地 8 ヶ所）。これら大学関連施設において 2011 年度に掘削工事を伴う埋蔵文化財協議を実施したのは 25 件であり、そのうち 1 件について発掘調査（49 日）、7 件について立会調査（のべ 35 日）を実施した。本年度は、試掘調査はなかった。協議件数 32 件を地区別に見ると、東



第 37 図　広島大学の校地所在地図（職員宿舎を除く）

1. 東広島地区　2. サイエンスパーク地区　3. 総合グランド地区　4. 下三永地区　5. 東千田地区　6. 霞地区　7. 東雲地区　8. 翠地区　9. 観音地区　10. 庚午南地区　11. 三滝地区　12. 廿日市地区　13. 宮島地区　14. 沖美地区　15. 呉地区　16. 竹原地区　17. 三原地区　18. 向島地区　19. 春日地区　20. 帝釈地区

広島地区（東広島市）16 件、霞地区（広島市）3 件、翠地区（広島市）3 件、東雲地区（広島市）1 件、三原地区（三原市）2 件である。本年度は本部が所在する東広島地区が主体で、これまで東広島地区とともに協議件数が多かった霞地区はわずか 3 件である。新外来診療棟建設をはじめとする再開発事業が一段落したためであるが、霞地区における再開発事業計画は進行中であり、一時的な状況と考えられる。その他の

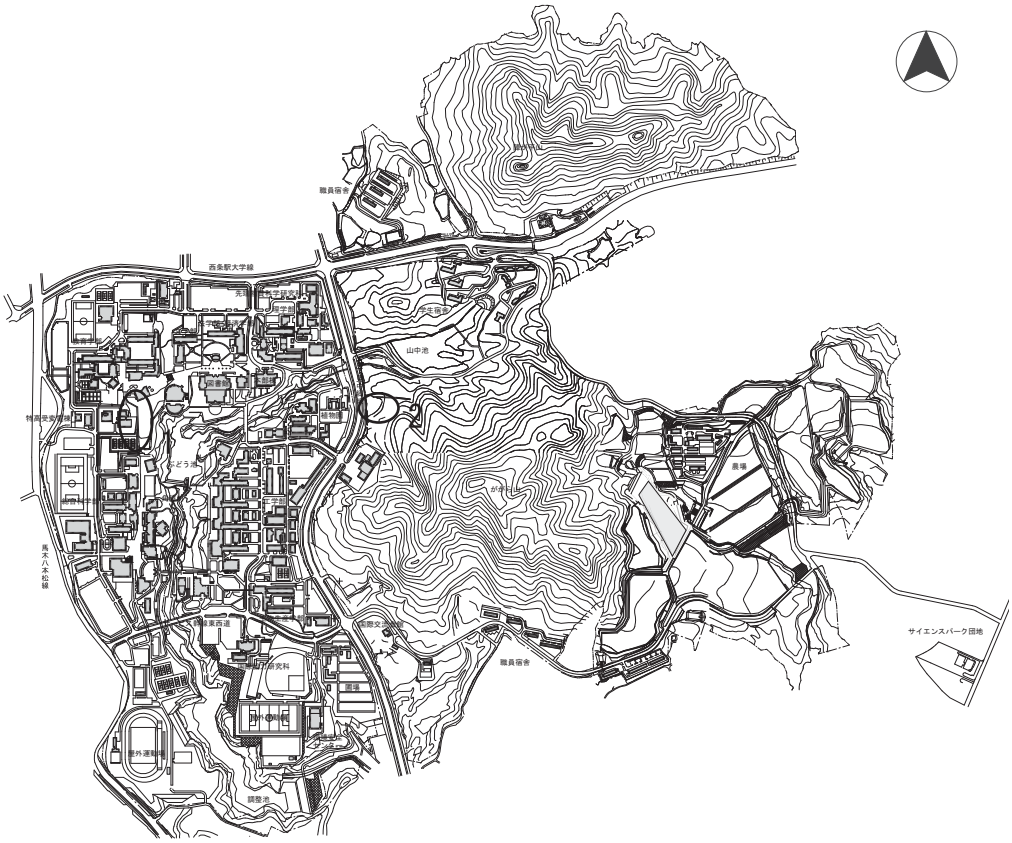
第 3 表　2011 年度（平成 23）広島大学における開発に伴う埋蔵文化財協議一覧

件　　名		対象面積（㎡）	協議書提出時期	対　応
東広島地区				
1	鴻の巣地区歩道設置工事	300.0	2011 年 3 月	発掘
2	工学部事務棟東側排水管改修工事	6.3	2011 年 5 月	工事
3	池の上学生宿舎電気設備改修工事	27.5	2011 年 5 月	工事
4	広島大学前交番北側外灯取設工事	18.0	2011 年 7 月	工事
5	法学部・経済学部駐輪場取設工事	280.0	2011 年 7 月	工事
6	附属幼稚園階段取設工事	7.0	2011 年 8 月	工事
7	山中池遺跡保存整備工事	400.0	2011 年 8 月	立会
8	工学部機械系共通実験実習棟改修そのほか工事	170.0	2011 年 9 月	工事
9	工学部ものづくり資材庫新設工事	51.0	2011 年 11 月	工事
10	生物生産学部食品製造工場ガス管改修工事	15.0	2011 年 11 月	工事
11	南グランドほか環境整備工事	1030.0	2011 年 12 月	工事
12	アカデミック地区工学部周辺サイン取設工事	50.0	2011 年 12 月	工事
13	国際の森植樹工事	280.0	2011 年 12 月	工事
14	工学部機械系共通実験実習棟西側植栽工事	4.0	2012 年 2 月	工事
15	学生プラザ周辺植栽工事	207.0	2012 年 2 月	工事
16	アカデミック地区サイン取設追加工事	2.0	2012 年 3 月	工事中止
霞地区				
1	社会医学第 2 研究棟東側慰霊塔植栽工事	16	2011 年 4 月	工事
2	喫煙室新営工事	15	2011 年 10 月	立会
3	歯学部駐輪場取設工事	556	2011 年 11 月	立会
翠地区				
1	附属学校部（翠地区）中高校舎 3 号館改修工事	840.0	2011 年 7 月	立会
2	附属学校部（翠地区）小学校運動場遊具移設・撤去工事	400.0	2011 年 8 月	一部立会
3	附属学校部（翠地区）小学校運動場遊具新設工事ほか	200.0	2011 年 9 月	工事
東雲地区				
1	附属学校部（東雲地区）基盤整備工事	400.0	2011 年 9 月	工事
三原地区				
1	附属学校部（三原地区）駐車場取設工事	1300.0	2011 年 8 月	立会
2	附属学校部（三原地区）小学校西側法面工事	50.0	2011 年 9 月	立会

地区では、翠地区、東雲地区、三原地区で本年度も１～３件の協議を行った。立会調査の実績で見ると、東広島地区１件、霞地区２件、翠地区２件、三原地区２件である。立会調査実施のべ日数の実績で見ると、東広島地区 23 日（24 回）、霞地区６日（８回）、翠地区３日（３回）、三原地区３日（４回）である（カッコ内は立会調査の回数）。東広島地区立会調査の 23 日は保存区整備工事であり、開発に伴う工事においては、霞地区の調査日数が多い。

発掘調査は東広島地区で１件を実施した。歩道設置工事に伴うもので、４月 11 日から 49 日間調査を実施した。調査では、旧石器～古墳時代の遺物・遺構や時期不明の遺構（土坑、炭化物集中遺構）が検出された。

なお、本年度５月に埋蔵文化財調査室は総合博物館と統合となり、総合博物館埋蔵文化財調査部門となった。組織改変となったが、埋蔵文化財調査部門が、これまで通



第 38 図　2011 年度東広島地区の立会・発掘調査位置図（縮尺１：20,000）

1. 鴻の巣地区歩道設置工事、2. 山中池南遺跡第２地点保存区整備工事

り、大学内の埋蔵文化財業務を担当するとともに、新たに博物館業務、学芸員養成に関わる教育業務を展示情報・研究企画部門と協力しながら担当することとなった。

２．試掘・立会・発掘調査の概要

次に、地区ごとに、発掘調査、立会調査の概要について述べてみたい。

東広島地区（東広島市）

１）鴻の巣地区歩道設置工事

所在地　　東広島市鏡山鏡山１丁目

調査期間　2011 年 4 月 11 日～ 7 月 22 日

調査面積　300㎡

調査者　　藤野次史、永田千織、山手貴生

調査概要　アカデミック地区中央部の鴻の巣地区に歩道を設置するため、調査を実施した。工事対象場所はほぼ全域が鴻の巣遺跡で、遺跡保存地区である。遺跡の現状は大半が山林であるが、保存区西端は山林が途切れて草地であり、冬季を中心に教育学部から総合科学部へ抜けるショートカット通路として利用されていた。正式な歩道として整備することから発掘調査を実施した。

鴻の巣遺跡はこれまで3回の発掘調査（第1次調査：1988年度、第2次調査：1989年度、第3次調査：2000年度）を実施しており、旧石器～古墳時代を中心とする遺構、遺物が多数検出されている。今回の発掘調査（第4次調査）は第1・2次調査の教育学部音楽棟および通路地区（Ⅰ区）の東側隣接地とその南側である。南北に細長い調査区で、幅約2ｍ、南北約130ｍである（第39図）。B4区、C4・5区、D5・6区、D7区北部は第1・2次調査区Ⅰ区の東側隣接地である。また、D・E9区、D・E10区付近から南側は丘陵平坦部の縁辺に位置しており、遺跡の西端部付近にあたると想定していた場所である。

基本層序は大きく6枚に区分される。各層の概要は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土。3枚に区分される。

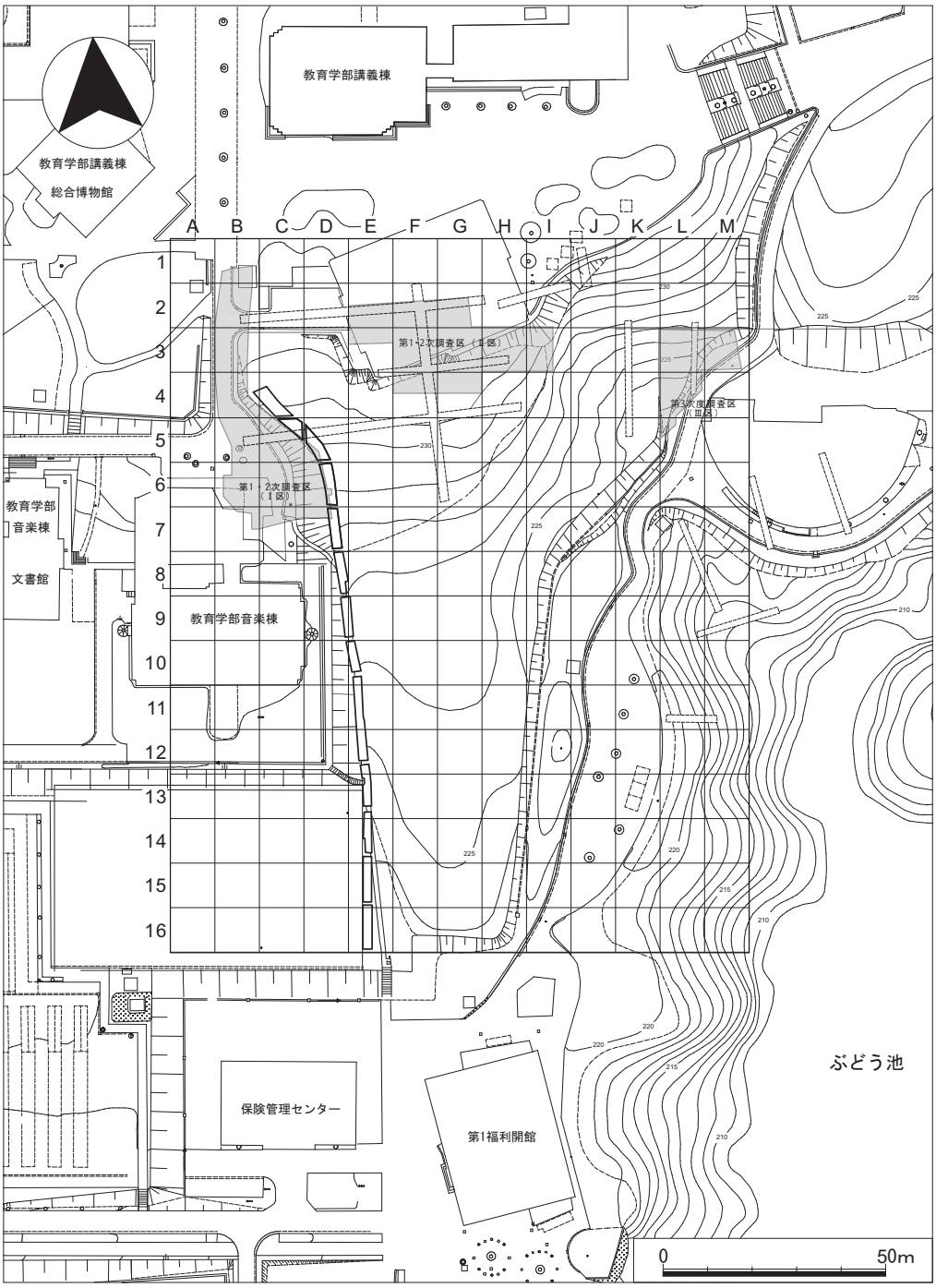
第Ⅰａ層　表土層。

第Ⅰｂ層　盛土。教育学部音楽棟ほか造成土で、調査区の全域に堆積する。

第Ⅰｃ層　旧表土。第1・2次調査時の表土層である。

第Ⅱ層　黄褐色～明褐色砂質土層。第1・2次調査の第Ⅱｂ層に対応する。マサ土を主体とする土層で若干の粘性がある。調査区北部（D7区以北）に堆積する。

第Ⅲ層　暗黄褐色～暗褐色粘質土。砂粒を含み、やや軟質である。3枚に区分できる。



第 39 図　鴻の巣遺跡調査区配置図

（太枠白抜き部分が第 4 次調査区である。灰色半透明部分は既往の発掘調査部分、破線は既往の試掘調査部分である。）

第Ⅲａ層　暗褐色～褐色粘質土。調査区中央部で途切れており、北側を第Ⅲ a1 層、南側を第Ⅲ a2 層とした。

第Ⅲｂ層　暗黄褐色～黄褐色粘質土。やや軟質で、砂質が強い。C4・5 区のみに堆積が認められる。

第Ⅲｃ層　黄褐色～褐色粘質土。E11 区以南では堆積が認められない。

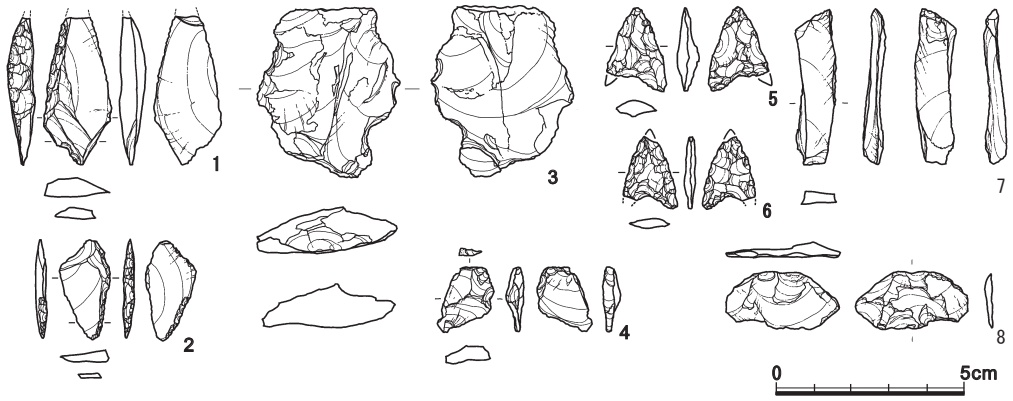
第Ⅳ層　明赤褐色～橙褐色粘質土。粘性が強く、全般的に砂粒の包含は少ない。E11 区を中心とする埋没谷を除いて調査区のほぼ全域に堆積している。

第Ⅴ層　明黄褐色粘質土。砂粒の包含は比較的少なく、軟質である。調査区北部の D6 区付近で堆積が収束している。E11 区を中心とする埋没谷を除いて調査区のほぼ全域で確認した。

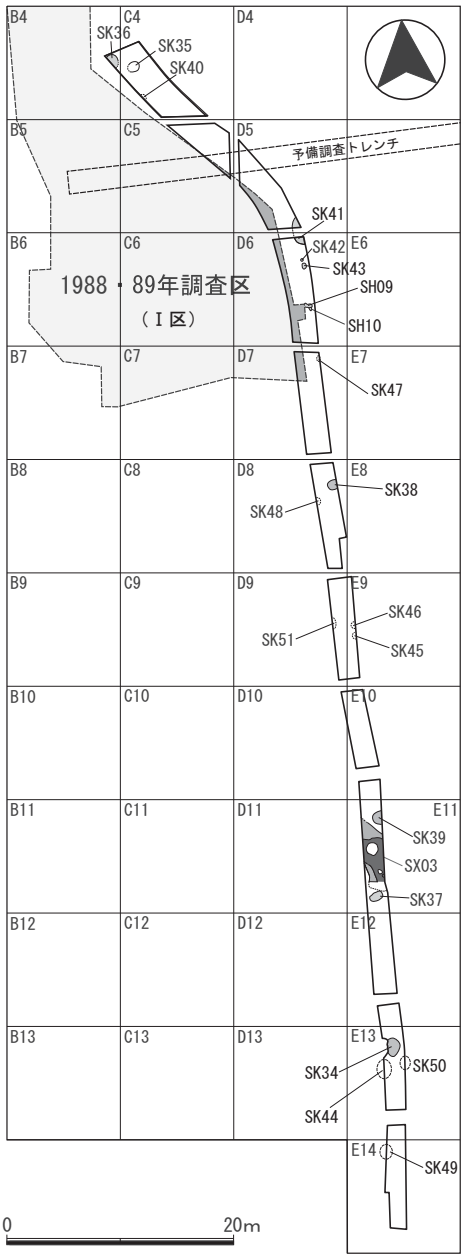
第Ⅵ層　暗橙褐色～暗赤褐色粘質土。砂粒を多く含み、固くしまっている。

調査では、旧石器～古墳時代の遺構、遺物のほか、時期不明の土坑 13、炭化物集中遺構 1 を検出した。旧石器時代では C5 区、E11 区などで石器 6 点が散漫に出土したのみで、遺構は確認できなかった。出土石器は、第Ⅴ層上部～第Ⅳ層に包含されているが、E11 区の埋没谷堆積土中からも 2 点が出土した。出土石器の内容はナイフ形石器、楔形石器、加工痕ある剥片、剥片である。ナイフ形石器は流紋岩製（第 40 図 1）と安山岩製（第 40 図 2）で、前者は切り出し形に、後者は左右対称（先端は欠損しているが、鋭利に尖っていたと推定される）に仕上げている。楔形石器（第 40 図 3）は水晶製で、小型品である。加工痕ある剥片（第 40 図 4）は流紋岩製で、幅広の縦長剥片の末端部を急角度に加工している。剥片はいずれも安山岩製である。

縄文時代では、土坑 6、炉跡 2 を検出した。掘り込み面は第Ⅳ層上面である。土坑は、



第 40 図　鴻の巣遺跡出土旧石器時代、縄文時代石器実測図



第41図　鴻の巣遺跡検出遺構配置図
（破線は土層断面で確認した土坑である）

写真1　調査区中央部・南部近景（南より）

写真2　縄文時代炉跡ＳＨ10（南より）

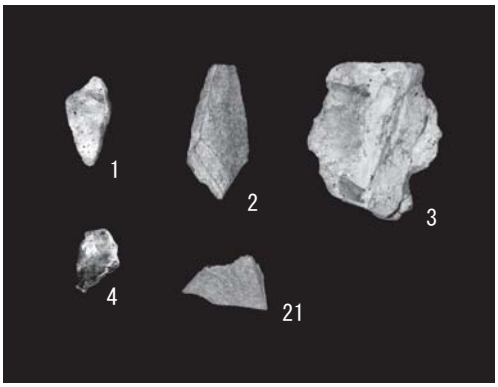
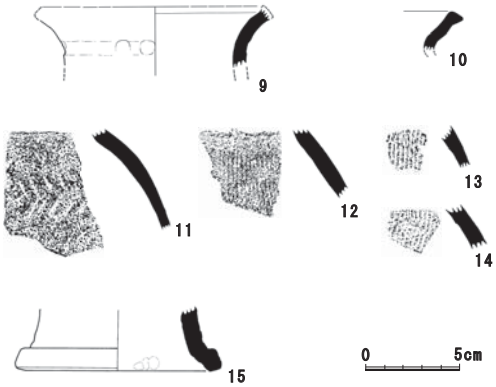


写真3　旧石器時代出土石器



第42図　鴻の巣遺跡出土弥生土器実測図

D7区に1（ＳＫ47）、D8区に1（ＳＫ38）、E13区に3（ＳＫ34・44・50）、Ｅ14区に1（ＳＫ49）が位置し、調査区南部に土坑4基が近接して分布している。ＳＫ47は幅約40cmのやや小型土坑であるが、その他は長径150cm前後の大型の土坑である。炉跡はD6区に位置する。炉跡は重複しており、ＳＨ10廃絶後、ＳＨ09を構築している。ＳＨ09の周辺には炉内堆積物の掻き出しに伴う灰、焼土、炭化物の混じった暗灰褐色土が広く堆積していた。遺構内および周辺で遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、炉跡は隣接する第2次調査区のＳＨ07と関連する遺構であり、早期に位置づけられるものと考えられる。土坑については出土遺物はなく、性格不明である。

縄文時代の遺物はわずか6点で、C4･5区、D6区など調査区北部で散漫に出土した。第Ⅲｃ層を主体に包含されている。石器はいずれも安山岩製で、石鏃、楔形石器、加工痕ある剥片が出土した。石鏃は3点出土しており、先端のみの1点を除くと、いずれも比較的抉りの浅い凹式である（第40図5･6）。楔形石器は2点あり､うち1点（第40図7）は薄手の剥片を素材とし､両側面に裁断面が認められる。もう1点（第40図8）は裁断面は見られないが、使用によってかなり薄手になっており、上下方向からの剥離面で構成されている。

弥生時代では、E11区埋没谷堆積土を中心に弥生土器が出土した。遺構は、後述の時期不明遺構の中に弥生時代に属する遺構が含まれている可能性があるが、明確に弥生時代に位置づけられる遺構は確認できなかった。

弥生土器は、器形を確認できるものでは壺形土器、甕形土器、高坏もしくは器台形土器がある。壺形土器は長頸壺形土器（第42図9）が認められる。甕形土器は小型（第42図10）、中型を主体とするようである。高坏もしくは器台形土器（第42図15）は直立気味の脚部で、ヨコナデ調整によって仕上げているが、あまり入念ではない。その他は大半が胴部破片（第42図11～14）で、甕形土器を主体とすると思われるが、内面のヘラ削り調整を丁寧にナデ消しているもの（第42図11）があり、壺形土器の可能性がある。

古墳時代では、D8 区で鉄鏃が 1 点出土したのみである。

このほかに、時期不明の遺構として、土坑 12、炭化物集中部 1 を検出した。掘り込み面は第Ⅲ c 層上面や第Ⅲ c 層より上位の層である。第Ⅲ a 層およびその上層では、弥生時代以降の複数時期の遺物が包含されていることや遺構に伴う遺物が出土していないことから時代を特定できない。遺構の掘り込み面は 4 面あり、土坑は第Ⅲ c 層上面を掘り込み面とするもの（ＳＫ 40 ～ 43・45・46・51）、第Ⅲ a2 層上面を掘り込み面とするもの（ＳＫ 48）、第Ⅲ c 層もしくは第Ⅲ a1 層上面を掘り込み面とするもの（ＳＫ 35・36）、埋没谷第 4 層上面を掘り込み面とするもの（ＳＫ 37・39）である。炭化物集中遺構（ＳＸ 03）は埋没谷第 4 層上面に堆積している。また、これらの遺構はいくつかの場所にまとまって検出されている。調査区北端部の B・C4 区に土坑 3（ＳＫ 35・36・40）、調査区北部の D6 区に土坑 3（ＳＫ 41 ～ 43）、調査区中央部の D8・9 区、E9 区に土坑 4（ＳＫ 45・46・48・51）、調査区南部の E12 区（埋没谷）に土坑 2（ＳＫ 37・39）、炭化物集中遺構 1（ＳＸ 03）が位置する。

土坑は、調査区端の土層断面で確認したものや調査区外に遺構が広がっているものがあるが、平面楕円形を呈するものが多く、その他は平面円形である。規模は推定復元したものを含め、長径または直径が 40 ～ 60cm、80cm 程度、110cm 程度、150cm 程度の 4 種類が認められるが、規模の大小にかかわりなく、炭化物を多量に包含するものが多い。炭化物集中遺構は炭化物層を中心とした遺構で、調査区外側の東側および西側に広範な遺構の広がりが想定される。炭化物層南東部に地床炉と考えられる焼土層が認められた。焼土層は東側の調査区外に広がっており、平面楕円形を呈するものと推定される。東西 40 ～ 50cm 程度の規模と推定されるが、遺構全体の炭化物を生産するには規模が小さい。遺構の広がりは北西－南東方向で、主軸方向で約 4.2 m、主軸直交方向で約 5.0 mの規模である。層の厚さは中央部で 15 ～ 20cm の規模で、周辺部に向かって徐々に薄くなっている。遺構の一部を検出したのみであり、性格は不明である。

2）山中池南遺跡第 2 地点保存整備工事

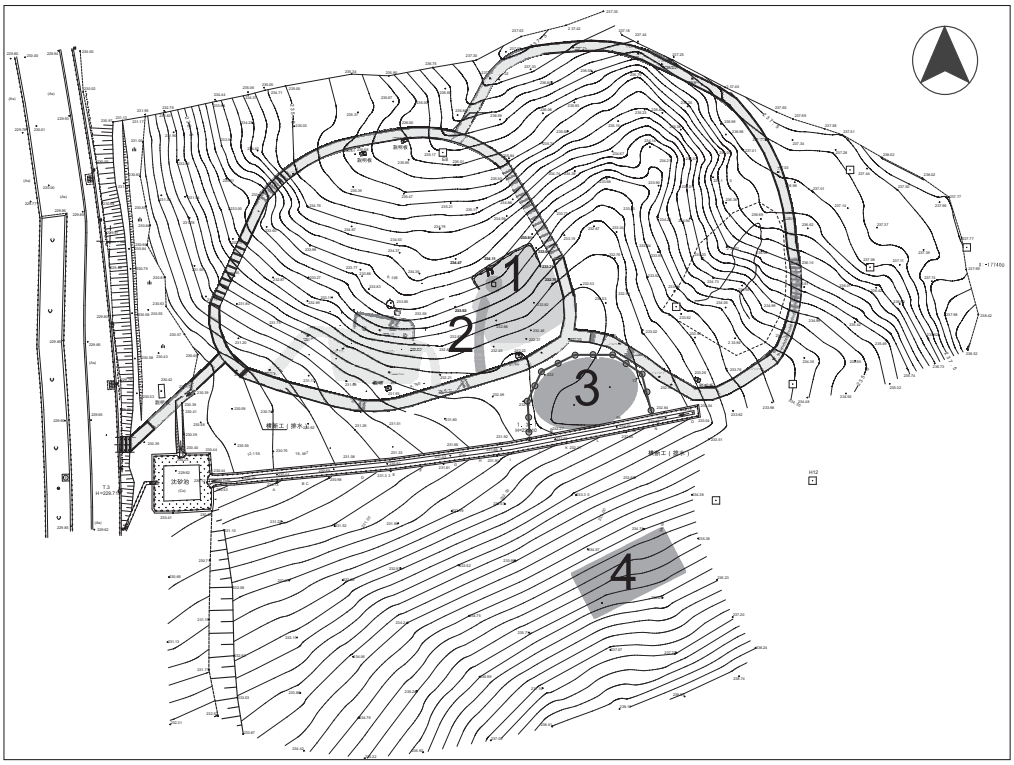
所在地　　東広島市鏡山 2 丁目

調査期間　2011 年 9 月 12 日～ 10 月 19 日

調査面積　367㎡

調査者　　藤野次史、永田千織、山手貴生

調査概要　山中池南遺跡第 2 地点は 1995 ～ 2000 年に発掘調査を実施し、調査地区



第 43 図　山中池南遺跡第 2 地点保存整備工事平面図（1：1,500）

1. 2 号住居跡鍛冶炉跡、2. 2 号住居跡アクセス用階段、3. 1 号須恵器焼成窯跡灰原、4. 盛土用採土採集場所

を含めた丘陵一帯が保存区として現状保存されている。発掘調査を実施した丘陵南斜面の古墳時代遺構については 2007 年度から順次復元整備を行っている。本年度は、2 号住居跡（工房跡）の復元整備（鍛冶炉ほかの復元）と 1 号須恵器焼成窯跡灰原の復元整備を実施した。また、合わせて 1 号住居跡、1 号須恵器焼成窯跡ほかの修復を実施した。

2 号住居跡の復元整備は 2 ヶ年計画の 2 年目で、本年度は鍛冶炉の復元と柱穴そのほかの整備を行った。鍛冶炉は型取りして復元した遺構を設置した。鍛冶炉の構造を示すため、炉掘り方内の木炭を半分充填し、保護のためにアクリルガラスを復元遺構の上に設置した。柱穴内に擬木を設置して柱を表現した。住居跡床面は、発掘調査で検出した床面の復元を昨年度の整備で実施したので、本年度は推定復元した床面部分についてガンコマサによる硬化処理を行った。また、散策道から復元住居へアクセスするための階段を 2 号住居跡西側面に設置した。階段は盛土を行って成形し、擬木を利用した階段枕木止めの掘り方はすべて盛土内に収まるようにした。

1号須恵器焼成窯跡灰原の復元整備は、表層土の漉き取りを行った後、保護柵支柱基礎掘り方を掘削した。復元作業予定地一帯は遺跡仮保存のため50cm程度の盛土を行っていたが、西端部ではほとんど盛土が流出していることが判明した。支柱設置個所はいずれも遺構調査済あるいは遺構が確認されなかった場所である。しかし、調査停止面（調査中に遺跡保存が決定されたため、灰原下底面以下の調査を実施していない）の下層には縄文時代ほかの包含層が広範囲に残存しているため、支柱掘り方のうち調査停止面より下層へ掘削を行う必要がある場所については、遺構、遺物の有無の確認を行いながら草削りによる掘り下げを行った。幸い、いずれの支柱掘り方においても遺構、遺物とも確認されなかった。基礎掘り方は深さ35cmで、掘削後、砕石を敷いてコンクリート基礎を設置し、支柱を設置した。次に、排水路の設置後、硬化剤を混入した土で盛土をして全体を成形し、散水して固結するため1週間程度放置した。その後、廃棄単位に基づく須恵器焼成窯灰原の復元を行った。廃棄単位が視覚的に識別できるように土に混入する硬化剤（ガンコマサ）を2種類用意し、硬化剤と木炭粉の混入比

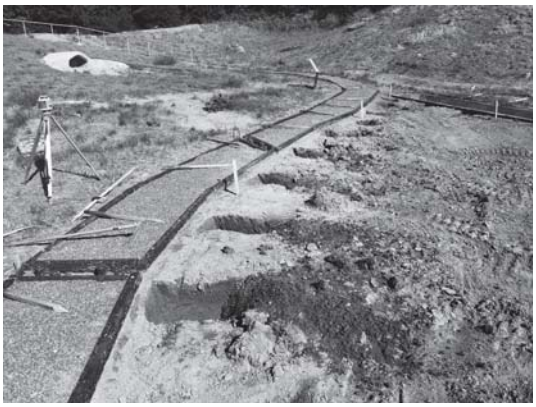
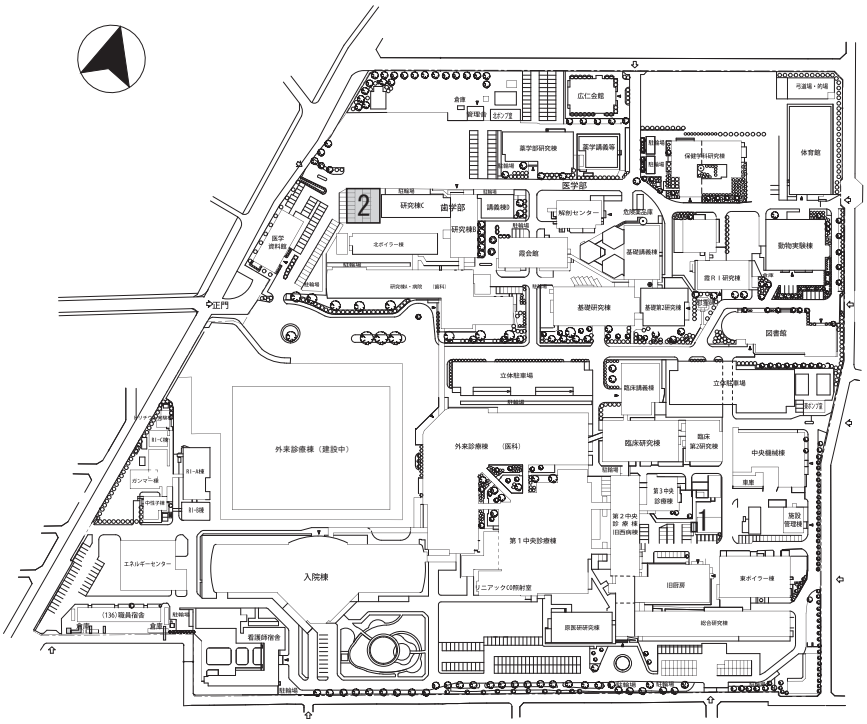


写真4　須恵器焼成窯跡復元灰原保護柵支柱掘り方掘削状況

写真5　須恵器焼成窯跡復元灰原硬化剤固結のための散水状況

写真6　復元2号住居跡階段設置状況



第44図　2011年度霞地区の立会・試掘調査位置図（1：4,500）

1.喫煙室新営工事、2.歯学部駐輪場取設工事）

率を変えて成形した。最後に散水して固結させ、保護柵支柱にロープを張って完成した。なお、使用した盛土は遺跡南部の発掘調査排土を利用した。

１号住居跡、須恵器焼成窯跡焚口部、窯跡東側の階段部の傷みが進行していたので、今回の復元作業に合わせて修復した。また、１号・２号住居跡北側からの雨水の流入が著しく、遺構に影響があるため、住居跡北側の斜面上部に盛土して雨水流入防止帯を設置した。盛土は遺跡南部の発掘調査排土を利用した。

霞地区（広島市）

1）喫煙室新営工事

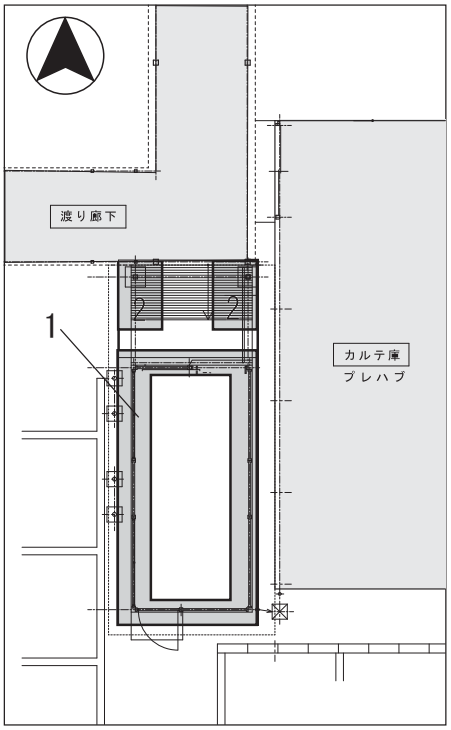
所在地　　広島市南区霞１丁目２番３号

調査期間　2011年12月３日

調査面積　12㎡

調査者　　藤野次史

調査概要　喫煙室の設置に伴って試掘（立会）調査を実施した。



第 45 図　喫煙室基礎掘り方掘削平面図
（1：500）
（1. 建物周囲の布掘り基礎掘り方、2. 入口柱基礎掘り方）

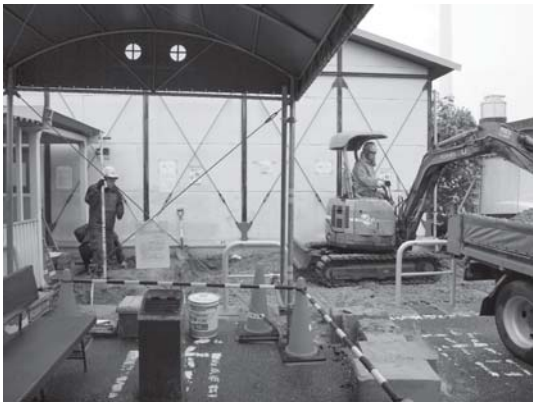


写真 7　掘削状況（西より）

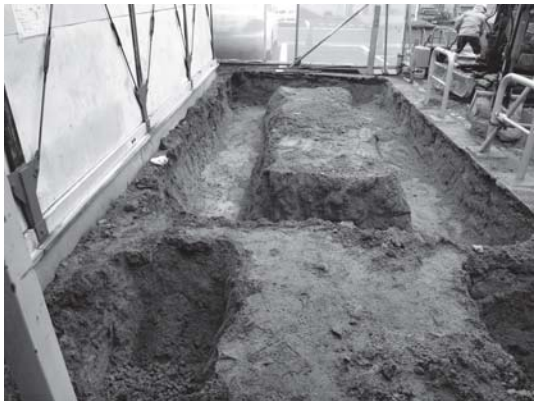


写真 8　基礎掘り方完掘状況（北より）

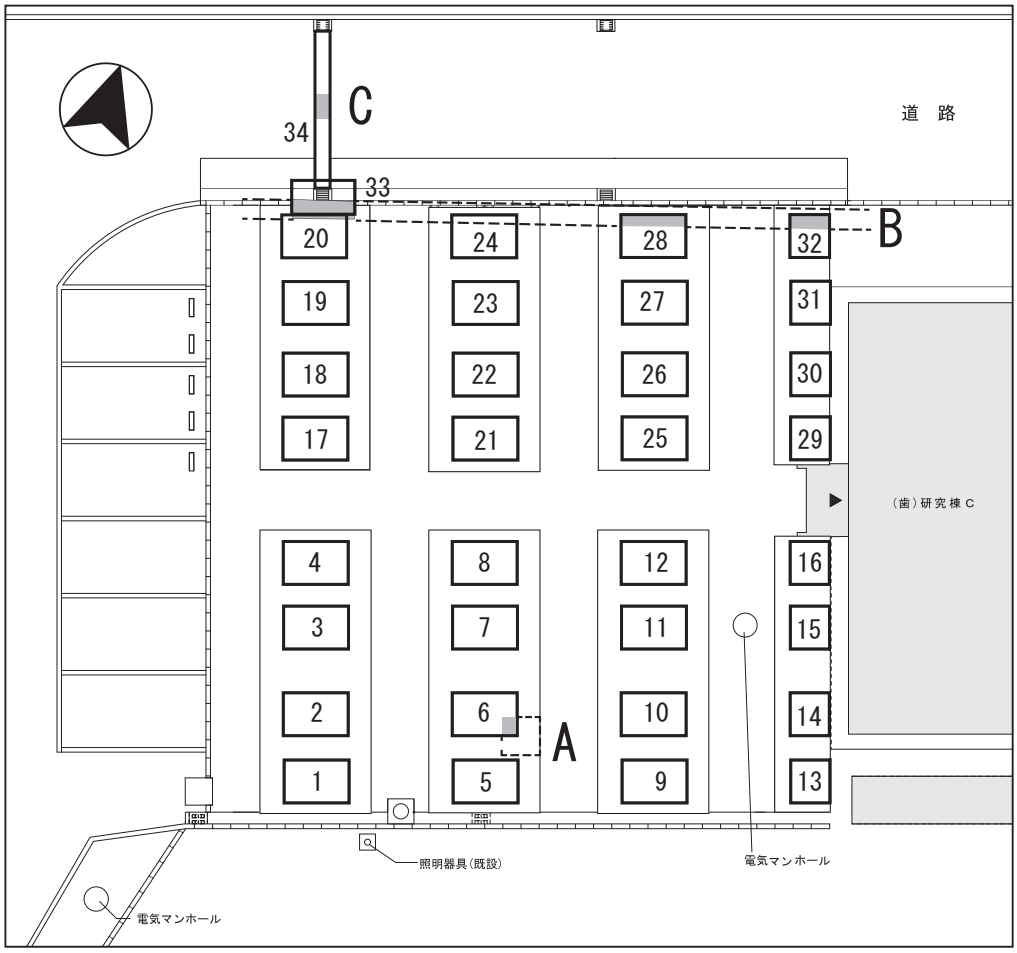
喫煙室設置場所はアスファルトで舗装されており、建物の範囲（入口屋根部分を含む）についてアスファルトを撤去した。掘削は建物周囲の壁の基礎、柱設基礎および入口屋根支柱基礎について行った。そのほかの部分についてはアスファルトを撤去したのみで、掘削は行わなかった（第 45 図）。建物の周囲は布掘り基礎で、幅約 80cm、深さ約 70cm の規模で掘削した。また、北側 2 本の柱は独立基礎で、南北 110cm、東西約 70cm、深さ約 60cm の基礎掘り方を掘削した。掘削部の堆積層はいずれも黄褐色砂質土（マサ土）で（写真 8）、遺構、遺物とも検出されなかった。

2）歯学部駐輪場取設工事

所在地　　広島市南区霞 1 丁目 2 番 3 号

調査期間　2012 年 1 月 31 日～ 2 月 15 日

調査面積　556㎡



第 46 図　歯学部駐輪場取設工事掘削範囲および検出遺構位置図（1：250）

（1 ～ 32 は駐輪場屋根基礎掘り方、33 は雨水排水路桝掘り方、34 は雨水排水管掘り方である。A ～ C は検出遺構で、A は石組桝、B は石組排水路、C はコンクリート構築物である。B の石組排水路は東西方向に配置されており、未調査部分は破線で示している。）

調査者　　藤野次史

調査概要　歯学部駐輪場取設工事に伴って試掘（立会）調査を実施した。

駐輪場取設工事のうち、駐輪スペースの屋根支柱基礎掘り方（第 46 図 1 ～ 32）および排水桝基礎掘り方（第 46 図 33）、排水管掘り方（第 46 図 34）の掘削に伴って調査を行った。屋根支柱基礎掘り方は合計 32 ヶ所（以下、基礎掘り方 1 ～ 32 区とする）で、東端部の基礎掘り方 13 ～ 16 区、29 ～ 32 区は、平面が東西 1.3 m、南北 1.4 m の大きさであり、その他は東西 2.1 m、南北 1.4 m の大きさである。いずれも現地表から 70cm の深さまで掘削した。排水桝掘り方は駐輪スペースの北側に接して位置し、約 1.1

mの深さまで掘削した。また、排水管掘り方は排水桝北側の東西道路に設置したもので、幅 50cm、深さ約 35cm の規模で掘削した。

調査では、調査区南西部の基礎掘り方 6 区で石組桝（第 46 図Ａ、写真 9)、調査区北端部の基礎掘り方 20 区、同 28 区、同 32 区および排水桝掘り方で石組排水路（第 46 図Ｂ、写真 10 ～ 15)、排水管掘り方でコンクリート構築物（第 46 図Ｃ、写真 16）を検出した。

基礎掘り方 6 区の石組桝は北西部を検出したのみで、規模は不明である。検出面は地表下約 50cm である。平面は正方形を呈するものと推定される。現状で東西 46cm、南北 56cm の規模である。石組桝を避けて基礎を設置し、現状のまま残すこととした。桝内部には大小の礫やコンクリート片などが充填されており、内部の調査は困難であった。調査区内の面積が狭いこと、現状保存することから礫等の撤去が可能な上部のみを露出させ、記録を行った。したがって、深さ等は不明である。上面で見ると、各辺は別々の切石で構築されている。各切石の幅約 20cm で、蓋受けを作り出している。蓋受けは幅 4 ～ 5cm、深さ 3cm 程度である。

基礎掘り方 20 区・28 区・32 区および排水桝掘り方で検出した石組排水路は調査区北側隣接地の東西道路にほぼ平行して構築されており、基礎掘り方 20 区、28 区、32 区の北端部で石組排水路の南辺を、排水桝掘り方南半部で石組排水路の大半を検出した（24 区の調査区内については削平されているようであり、確認できなかった)。検出面は地表下約 50cm である。基礎掘り方 20 区・28 区については遺構を撤去することなく基礎を設置することが可能であったため、石組排水路を現状保存することとし、現状を記録した。排水桝掘り方において検出した石組排水路については桝を設置するため撤去せざるを得なかったことから、下部構造を含めて記録した。調査に基づくと、石組排水路構築の手順は、掘り方を掘削した後、掘り方底面中央部に長さ 20cm 大の栗石を敷き並べる。栗石を敷き並べる幅は約 70cm である。栗石の上にコンクリート基礎を設置しており、コンクリート基礎は厚さ 12 ～ 15cm で、コンクリート内に大小の円礫を多数含んでいる。コンクリート基礎の両側に花崗岩の角柱状切石を設置し、切石の間に漆喰状の硬化剤（モルタルかもしれない）を厚さ 10cm 程度敷き詰めて排水路底面を構築している。角柱状切石は断面方形で、一辺 20cm 前後の規模（排水路側面側がやや長く幅 21cm、上面側が幅 18 ～ 19cm である）であり、長さ 1.7 m程度を 1 単位としている。排水路の規模は内法で幅約 25cm、深さ 15cm で、底の断面はわずかにＵ字形を呈している。石組排水路は調査区外へ延びており、東西方向に少

写真 9　基礎掘り方 6 区の石組桝検出状況（北より）

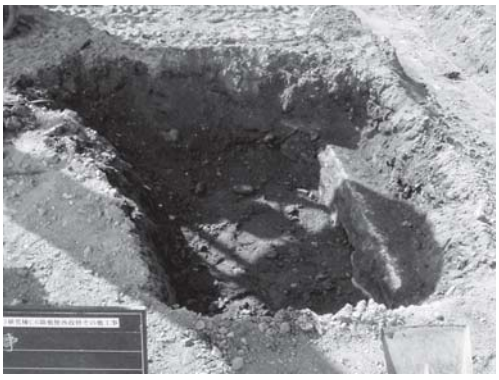


写真 10　基礎掘り方 20 区の石組排水路検出状況（東より）

写真 11　基礎掘り方 28 区の石組排水路検出状況（南より）

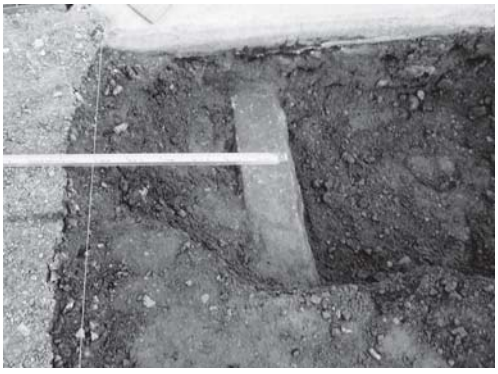


写真 12　基礎掘り方 32 区の石組排水路検出状況（西より）

写真 13　基礎掘り方 33 区の石組排水路検出状況（東より）

写真 14　基礎掘り方 33 区の石組排水路検出状況（北西より）

写真 15　排水桝掘り方の石組排水路と兵器支廠造成土検出状況（南より）

写真 16　排水管掘り方のコンクリート構築物検出状況（北より）

なくとも 20 m以上直線的に設置されている。

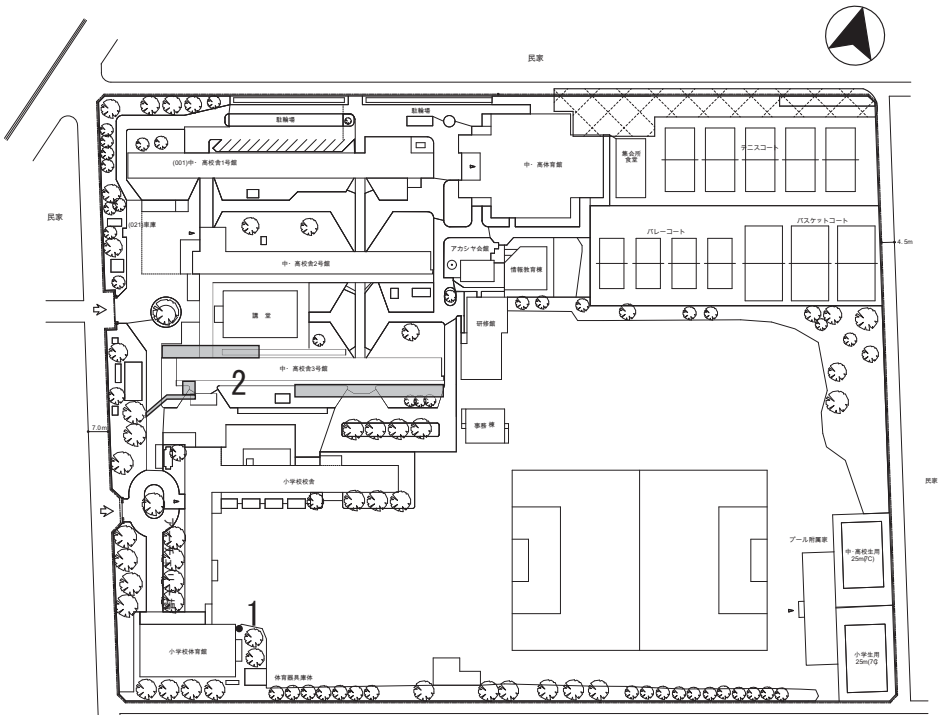
排水管掘り方で検出したコンクリート構築物は道路（歯学部北側の東西道路）のほぼ中央に位置し、地表下約 15 ～ 20cm で検出した。南北約 80cm、厚さ 15cm 程度の規模である。東西に長い構築物の一部と思われる。上面は平坦であるが、南側の約半分はわずかに高まっている。

今回検出した石組桝、石組排水路については、遺構構築面が地表下約 50cm にあり、周辺で検出された旧広島陸軍兵器支廠（補給廠）関連遺構と同レベルに位置すること、排水桝掘り方（33 区）で石組排水路が旧広島陸軍兵器支廠造成土上面に構築されていることを確認したこと、石製構築物であること、使用コンクリートは大小の円礫を多量に含むこと、石組排水路の基礎として大型栗石を使用していることなどの点から、広島陸軍兵器支廠（補給廠）関連の遺構と推定される。調査区北側の排水管掘り方で検出したコンクリート構築物については、基礎掘り方 7 区において同レベルからコンクリート構築物を、同 10 区で同レベルから掘り込まれた大型土坑を確認している。石組桝、石組排水路に比べて検出面がかなり高く、これまで同レベルで広島陸軍兵器支廠（補給廠）関連遺構を確認していないこと、コンクリート層の下はバラス状の砕石を基礎としていることなどから、第 2 次大戦後の遺構と推定される。

翠地区（広島市）

1）小学校運動場遊具移設・撤去工事

所在地　　広島市南区翠 1 丁目 1 番 1 号



第 47 図　2011 年度翠地区の立会・試掘調査位置図（1：3,000）

（1. 小学校運動場遊具移設・撤去工事、2. 中高校舎 3 号館改修工事）

調査期間　2011 年 8 月 31 日

調査面積　400㎡（調査面積は約 1㎡）

調査者　　藤野次史

調査概要　附属学校部（翠地区）小学校運動場遊具移設・撤去工事のうちバスケット・ゴールの移設に伴って試掘（立会）調査を実施した。

写真 17　バスケットゴール基礎完掘状況（南より。破線より上はグランド造成に伴う盛土。）

小学校グランドの南西部に位置するバスケット・ゴールを体育館の西側へ移設した。元位置のバスケット・ゴール基礎掘削は、設置時の掘り方内に収まるように実施した。移設先については基礎掘り方を深さ約 1 m まで掘削した。地表下約 50cm まではグランド造成に伴う盛土で、それ以下は黄褐色粘質土が堆積してい

た（写真 17）。旧制広島高等学校建設に伴う埋立・造成土と思われる。遺構・遺物とも発見されなかった。

2）中高校舎 3 号館改修工事

所在地　　広島市南区翠 1 丁目 1 番 1 号

調査期間　2011 年 9 月 22 日、12 月 6 日、12 月 18 日、2012 年 2 月 20・21 日

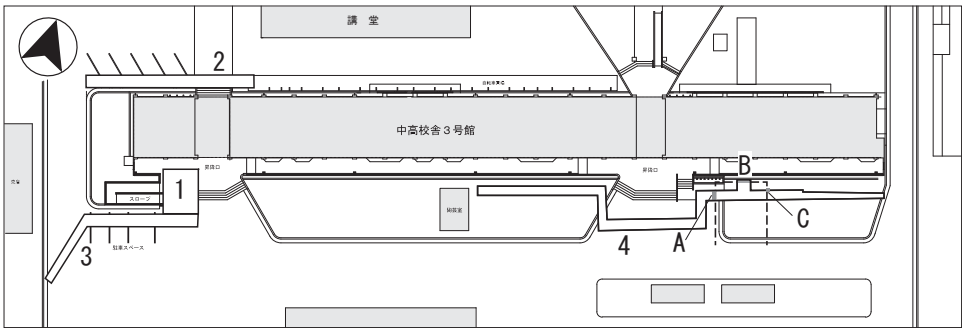
調査面積　840㎡

調査者　　藤野次史

調査概要　広島大学附属学校部（翠地区）中高校舎 3 号館改修に伴う工事のうち、エレベーター設置工事（第 48 図 1）、電気配管および雨水･汚水配管の改修･新設工事（第 48 図 2 ～ 4）について試掘（立会）調査を実施した。

エレベーター設置に伴う基礎掘削工事区（以下、1 区とする）の調査はバックホウにより地表下 3 m付近まで掘削を行ったが、地表下 1.5 m付近から湧水し、壁面の崩落が著しく、2 m以下の状況は明確にはできなかった（写真 18）。堆積状況の観察が可能な東壁では、地表下 50 ～ 60cm 程度までは第二次大戦後の盛土と思われ、その直下に橙褐色砂質土（粘性あり）が堆積している。同層は固く締まり、厚さ 20cm 程度で、旧制広島高等学校の造成土と思われる。その下層は暗灰色系砂質土（水田土か）、暗灰色系砂層（水成堆積層）が堆積している。遺構、遺物とも確認されなかった。

電気配管および雨水・汚水配管の改修・新設工事に伴う配管掘り方掘削のうち、中高校舎 3 号館北西側工事区（第 48 図 2。以下、2 区とする。）の調査では地表下 90 ～ 150cm まで掘削を行い、1 区と同様の堆積状態を確認した（写真 19）。最深部の掘り底面では暗灰色系砂層（水成堆積層）が露出した。中高校舎 3 号館南西側工事区（第



第 48 図　中高校舎 3 号館改修工事立会調査対象工事および検出遺構位置図（1：1,000）
（1 はエレベーター取設工事、2 ～ 4 は電気線・汚水管取設工事で、A ～ C は煉瓦基礎の範囲を示す。）

写真 18　1 区完掘状況（北西より）

写真 19　2 区完掘状況（南西より）

写真 20　3 区完掘状況（北より）

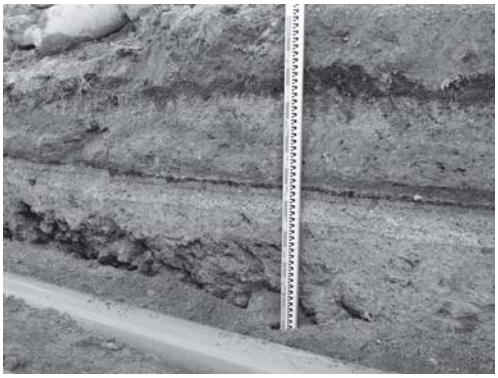


写真 21　基礎掘り方 4 区の東部の土層堆積状況（南より）

写真 22　4 区東部建物基礎検出状況（南西より。破線は建物基礎の外側のライン。）

写真 23　4 区東部 A 地点検出建物基礎遺構（西より）

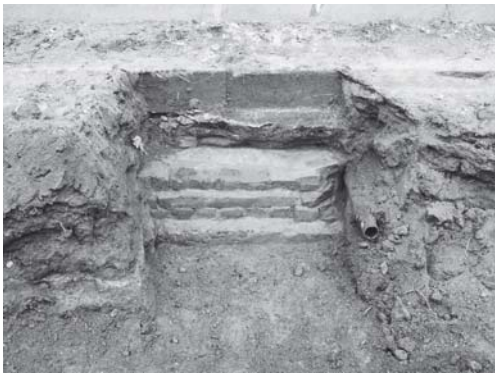


写真 24　4 区東部 B 地点検出建物基礎遺構（南より）

写真 25　4 区東部 C 地点検出建物基礎遺構（南より）

48 図 3。以下、3 区とする。）では地表下 120 ～ 160cm まで掘削を行い、1 区と同様の堆積状態を確認した（写真 20）。最深部の掘り底面では暗灰色系砂層（水成堆積層）が露出した。中高校舎 3 号館南東側工事区（第 48 図 4。以下、4 区とする。）では地表下 40 ～ 100cm まで掘削した。4 区東部は地表下 90cm 前後まで掘削したが、黄褐色砂質土（旧制広島高等学校造成土。4 区では上部はやや粘性がある。）上の堆積が良好で、木炭層を含む 7 枚の堆積層を識別することができた（写真 21）。黄褐色砂質土上には、下層より淡橙灰色砂質土（マサ土。上部は上層の影響を受けていると思われ、灰褐色を呈する。）、第 1 木炭層、灰褐色砂質土、第 2 木炭層、灰褐色砂質土、第 3 木炭層（灰黒色で、灰や砂質土を多く含み、純粋な木炭層ではない）、暗灰色砂質土（数枚に区分可能）の順で堆積している。最下層の淡橙灰色砂質土は旧制広島高等学校の造成土と思われる。第 1 木炭層は厚さ 0.5cm 程度と薄く、かろうじて確認できる程度である。第 2 木炭層は厚さ 1 ～ 2cm で、黒味が強い。第 3 木炭層は第 2 木炭層上に間層（灰褐色砂質土）を挟んで堆積するが、間層は数 cm 程度できわめて薄い。第 1 木炭層より上層の堆積層の年代は出土遺物がなく、現状では旧制広島高等学校設置以降という以外は明らかではない。後述する遺構との直接的な関係を今回の調査では確認することができなかったが、黄褐色砂質土上面の第 1 木炭層が旧制広島高等学校建設以降削平を受けていないとすれば、少なくとも第 1 木炭層は第二次世界大戦以前に堆積した可能性がある。

4 区東部（中高校舎 3 号館東部階段の東側）では建物基礎を検出した（第 48 図 A ～ C、写真 22）。建物基礎は上半部が煉瓦積、下半部がコンクリートで構築されてい

た。煉瓦基礎は3段分が残存しており、幅41cmの規模である。A地点では配管のため遺構を撤去する必要があり、下部構造を含めて調査し、記録した（写真23）。B地点の煉瓦基礎は主配管から建物へ引き込む配管の掘り方北端部で確認したもので、東西方向に配置されている（写真24）。中高校舎3号館南側通路（廊下）の犬走り部に位置しており、残存の状況から見て犬走りに平行するように東西方向に配されているものと思われる。煉瓦基礎の上面に配管することが可能であることから現状保存した。C地点では調査区内の遺構はすでに削平されており、北側断面で建物基礎断面を確認した（写真25）。下部構造を含めて調査を行ったA地点の建物基礎に基づいて基礎の構造等について述べると、煉瓦基礎の平面は前後3列で構成され、西側1列が小口積、東側1列が横手積である（最上段）。煉瓦は、長さ20cm程度、幅10cm程度、厚さ5cmの大きさである。コンクリート基礎は幅約54cm、厚さ約25～30cmの規模であり、コンクリート内に大小の円礫を多数含んでいる。コンクリート基礎は暗灰色砂質土（水田土か）上に直接構築されている。建物基礎遺構は中高校舎3号館とほぼ直交する。南北建物で、今回検出したのはその北端部と考えられる。東西約7.5mの規模で、南北の規模は不明である。コンクリート基礎の状況や煉瓦積みの基礎であることから見て、旧制広島高等学校関連の遺構である可能性が高い。

三原地区（三原市）

1）駐車場取設工事

所在地　三原市館町2丁目6番1号

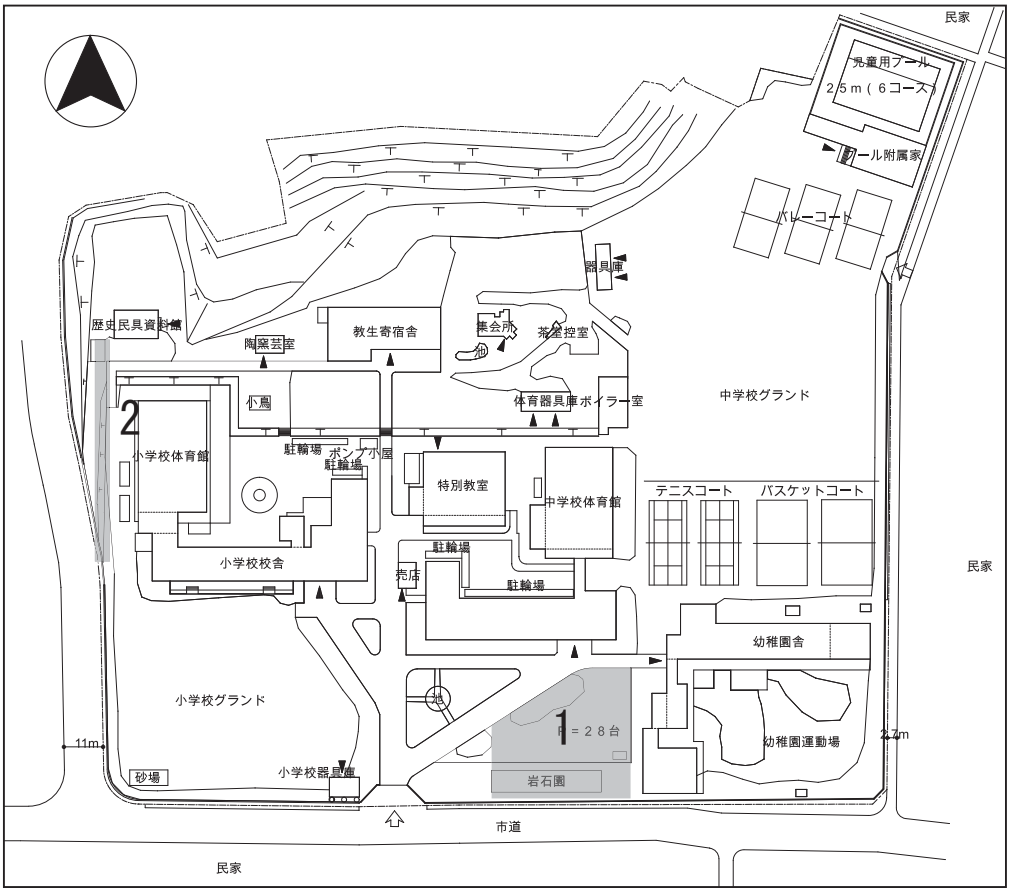
調査期間　2011年8月19日

調査面積　1300㎡

調査者　藤野次史

調査概要　広島大学附属学校部（三原地区）中学校舎南側の駐車場取設工事に伴って試掘（立会）調査を実施した。（第50図1）。

対象地の現状は非舗装の駐車場と緑地帯であり、緑地帯は大小の高木および低木が植樹されていた。調査時点では、大小の高木はすべて伐採されており、樹根を残すのみの状態であった。高木の抜根は緑地帯東側よりバックホウを利用して実施した。抜根に伴う掘削は50～80cm程度（主根部は1m程度まで掘削されている可能性はあるが、調査では確認できなかった）の深さで、いずれの掘削部においても、堆積土の主体は橙色系砂質土（マサ土）、黄白色系砂質土（マサ土）で、附属学校部および旧

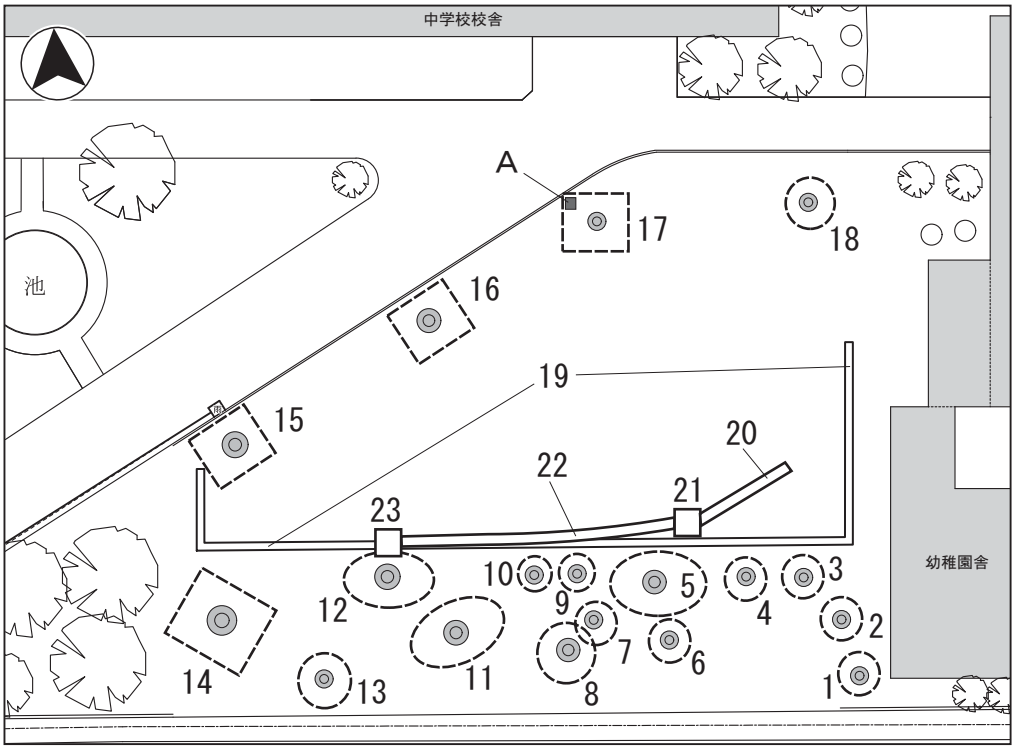


第 49 図　2011 年度三原地区の立会・試掘調査位置図（1：3,000）

（1. 駐車場取設工事、2. 小学校校舎西側法面整備工事）

三原女子師範学校設置の際の造成土と思われる。

抜根は合計 18 本である。伐根に伴う掘削穴の規模は、高木の幹の太さや根の張り方によって異なり、最小で直径約 2 m、最大で約 5.8 m×約 5.1 mである。掘削順に伐根 1 ～ 18 区として調査区名を付し（第 50 図 1 ～ 18）、掘削中および掘削後の排土の観察を行ったが、遺構・遺物ともに確認できなかった。緑地帯西端部の伐根 14 区、中学校校舎玄関南側の伐根 17 区について一部の壁面全体を清掃し土層観察を行った。伐根 14 区（写真 26）では伐根 1 ～ 13 区では観察されなかった暗灰褐色土が地表下約 40cm 以下に堆積しており、土師質土器細片を採取した。土師質土器は時期不明である。土坑状の穴が存在するかもしれないが、確認には至らなかった。伐根 17 区は西側の壁面の一部の清掃を行うとともに、人力で地表下約 1 mまで掘り下げた（第



第 50 図　駐車場取設工事に伴う掘削位置図（1：500）

（1 ～ 18 は中･高木撤去は掘り方、19 は現駐車場排水路、20･22 は排水管掘り方、21･23 は桝掘り方である。
Ａは試掘区である。）

50 図Ａ、写真 27 白枠部分）。地表下約 90cm で黒灰褐色粘質土が露出し（写真 28）、同層から近世と思われる陶磁器片数点が出土した（写真 29）。遺物包含層の可能性が高い。黒灰褐色土上に造成土と考えられるマサ土が複数枚堆積しており、上部には瓦片や暗褐色系砂質土が数枚認められた。上部は旧制三原女子師範校に関わる堆積層と推定される。

既設の駐車場排水路（第 50 図 19）は掘り方内の掘削で撤去した。新設の排水路については、東端部の既存排水桝から西へ直線的に約 5.7 mほど掘り進む予定であったが、既存桝のすぐ東側（約 1 m）で配管が多数露出し、西に向かって直線的に掘り進むことが不可能となったため、南西方向に掘り進み、当初の予定より約 5 m南側に中間の排水桝（第 50 図 21）を設置し、さらにそこから予定の西側排水桝（第 50 図 23）まで直線的に掘削した。

東端部の既存排水桝から中間の排水桝までの排水管掘り方（第 50 図 20）は幅約 1.3 m、深さ 90 ～ 100cm の規模で掘削した。基本的にはすべて旧制三原女子師範校の造

写真 26　伐根 14 区完掘状況（南西より）

写真 27　伐根 17 区完掘状況と試掘区（東より）

写真 28　伐根 17 区試掘区と西壁堆積状況（東より）

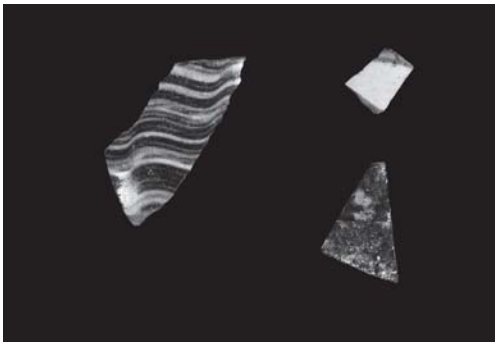
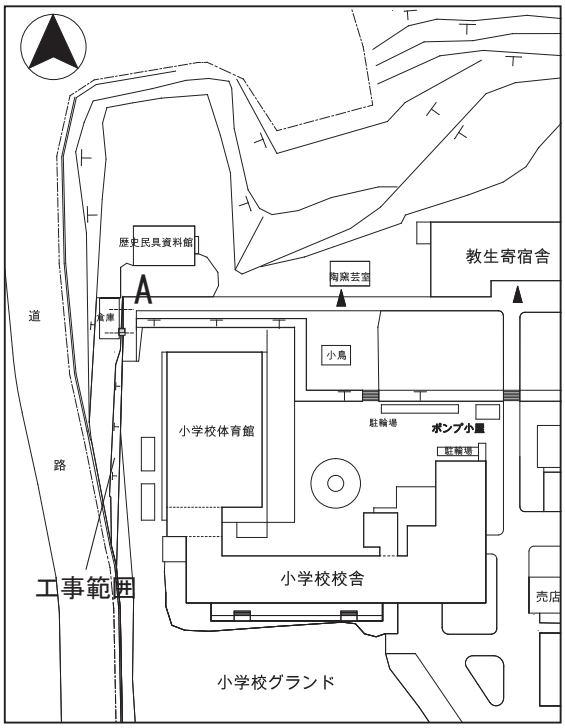


写真 29　伐根 17 区試掘区出土遺物

写真 30　排水管掘り方完掘状況（東より）

写真 31　排水管掘り方西半部完掘状況（北東より）

成土および附属学校部の造成土（盛土）と判断された。また、中間の排水桝掘り方と西端の排水桝掘り方の間の排水管掘り方（第50図22）は東西約17.5 m、幅1.8 mの規模で掘削し、北側は45度程度の傾斜面とした。中間の排水桝掘り方部分から西側の排水路掘り方にかけて煉瓦組遺構を検出した（写真30中央下部）。煉瓦を除去すると煉瓦の南側は空洞で、炭化物のような黒色堆積物が詰まっていた。陶磁器の破片や焼土なども含まれており、焼却施設の可能性がある。煉瓦遺構の西側に接してモルタルの小区画を検出した（写真30中央上部）。南北方向の規模は不明であるが、東西幅は75～93cmと不揃いで、80cm程度のものが多い。南側は60～70度程度の傾斜を持った壁面である。煉瓦組遺構の西側に7区画分を確認することができた。調査後、広島大学移管当時の旧制女子師範校建物配置図を入手し照合したところ、女子便所の位置にあたっており、トイレの浄化槽あるいはし尿タンクと推定される。また、中間の排水桝と西端排水桝の間の排水管掘り方西部で土坑状の落ち込みを確認した（写真31）。東西幅約2.1 m、深さ60cm以上の規模で、旧制女子師範学校遺構面から掘削されている。土坑内には、煉瓦片、大小角礫が包含されていた。土坑周辺は遺構上面に広く木炭層が堆積しており、西端の排水桝に向かって厚さを増していた。性格は不明である。



第51図　法面整備工事位置図（1：1,500）
（1Aは試掘区で、灰色部分は溝状遺構、破線は溝状遺構の推定範囲を示す。）

2）小学校校舎西側法面整備工事

所在地　　三原市館町2丁目6番1号

調査期間　2012年2月24日～2月27日

調査面積　50㎡

調査者　　藤野次史

写真 32　小学校西側法面の工事前の状況（南より）

写真 33　法面南部～中央部掘削完了状況（南東より）

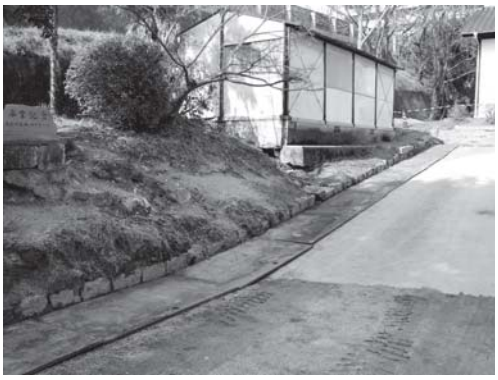


写真 34　北部の法面の現状（南東より）

写真 35　北部の法面の試掘と溝状遺構検出状況（北より。破線より上が溝または堀。）

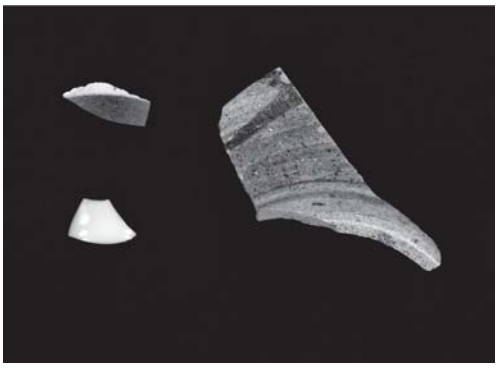


写真 36　北部の法面試掘区出土遺物

調査概要　小学校舎西側の法面整備工事に伴って試掘（立会）調査を実施した（第51図）。土壁の法面を50cm程度削平し、新たに壁面用コンクリート・ブロックを使用して壁面改修した。現状の法面は南端部から中央部までは1.5 m程度の高さである（写真32）が、北部は0～50cm程度の高さである（写真34）。法面の南端部から順次掘削を行い、最下段に設置されていた切石列（一段のみ）についても合わせて撤去した。法面の高さが高い南部～中央部については、法面基底面から約60～65cm以下はすべて地山と思われる堆積物である（写真33）。その上部は盛土と思われるが、瓦片、土管片が少量含まれる程度で、少なくとも近世およびそれ以前の遺物は出土しなかった。

北部については掘削に先行して、北端から約5 m南の地点に1辺50cm程度の方形の調査区を設定し、深さ約60cmまで人力で試掘調査を行った。地表下約30cmまでは中型の礫を多数含む砂礫層で、その下層20～30cmは小礫を多数含む暗灰褐色砂質土であった。下層の堆積層は溝等の埋積土に類似し、近世～近代と思われる陶器片1点が出土した（写真36左上）。さらにバックホウで試掘範囲を前後1 m程度拡張し、全体で南北約2 mの範囲を試掘した。最初に人力で調査した部分の南に大型の礫があり、それより南側では暗灰褐色砂質土は検出されず、北側に向かって広がっていることを確認した（写真35）。溝（あるいは堀）の可能性がある。暗灰褐色土付近を中心に壁面を清掃した際に陶器1点、磁器1点が出土した（写真36左下・右）。近世～近代に属する遺物と思われる。掘削工事の際に暗褐色砂質土の広がりを確認する予定であったが、工法との関係で調査することができなかった。旧三原女子師範学校が広島大学へ移行した時期の建物配置図には溝、堀等は示されていないことから、検出遺構が溝あるいは堀であるとすると、少なくとも第2次世界大戦以前に位置づけられる。

3. 調査の成果

2011年度の開発に伴う立会・試掘調査ならびに発掘調査は、東広島地区2件、霞地区2件、翠地区2件、三原地区2件の合計8件を実施した。東広島地区では、鴻の巣遺跡第4次発掘調査を実施した。歩道建設に伴う調査のため、幅約2 m、長さ約130 mの細長い調査区で、遺跡を南北に縦断するような形となった。調査区の大半は遺跡中央部に位置する埋没谷に近接しており、縄文時代の土坑6、炉跡2および時期不明の土坑12、炭化物集中遺構1を検出した。旧石器～古墳時代の遺物が出土したが、旧石器・縄文・古墳時代の遺物は少量で散漫な分布状況であった。弥生時代の遺物は

弥生土器が約150点出土したが、大半は埋没谷埋積土からの出土であった。今回の調査では出土遺物量が少なく、時期を確定できる遺構も多くはなかったが、保存区南部に調査が及び、保存区全域に遺構・遺物が分布することを確認したこと、遺跡中央部の埋没谷の位置の全体をほぼ推定できるようになったこと、保存区の中心である丘陵平坦部に弥生時代後期の遺構が存在する可能性がきわめて高くなったこと、第3次調査の^{14}C年代測定の結果を含め中世前期の遺構が存在する可能性が高くなったことなど、多くの成果を得ることができた。

霞地区では、歯学部駐輪場取設工事地区で、石組桝、石組排水路を検出した。広島陸軍兵器支廠（補給廠）に関連すると考えられる遺構で、霞地区北西部では、2010年度に立会調査を実施した駐車場の外灯新設・改修工事（藤野2013）に続いて2例目であり、新たな資料の追加となった。石組排水路は北側隣接地の東西通路にほぼ平行して配置されており、工事地区内あるいは隣接して建物跡の存在が予想される[(1)]。翠地区では中高校舎3号館改修工事において旧制広島高等学校関連施設と考えられる建物基礎を検出した。翠地区において旧制広島高等学校建設時の造成土（盛土）は確認されていたが、明確な構築部は初めての確認となった。三原地区では、駐車場取設工事において近世の可能性がある陶磁器が出土した。旧制三原女子高等師範学校および広島大学附属学校建設に伴う造成土（盛土）下層の黒灰褐色粘質土から出土したもので、遺物包含層と思われる。また、三原女子高等師範学校施設と考えられるトイレ遺構を検出した。小学校校舎西側法面整備工事では溝または堀と考えられる遺構を確認した。埋土中から近世～近代と考えられる陶磁器が出土した。三原地区は近世絵図によると、全域が武家屋敷に比定されるが、これまで関連の遺構・遺物の検出はなく、初めて近世武家屋敷に関連する可能性のある遺構・遺物を確認した。検出遺構はきわめて小面積であり、内容や性格を明らかにできる状況ではなく、出土遺物も少量であるが、確実に関連遺構・遺物が残されている可能性を示したことは重要である。また、旧制三原女子師範学校関連の遺構の確認も初めての事例となった。現在の通路や運動場、広場などに関連遺構が残されている可能性があり、今後注意して行く必要がある。

註

(1) 2013年度に防衛省防衛研究所資料室に保管されている資料の中に広島陸軍兵器支廠の建物配置図が存在することがわかり、入手した。配置図は1921年（大正10）、1936年（昭和11）の2枚がある。広島大学が移転した時点では広島陸軍兵器補給廠の建物等の構築物の大半が残っていたが、現在は敷地南境の石垣などのごく一部を除くと、地表から確認できる構築物は残されていない。しかし、現在の校内道路

は当時の道路や通路をよく反映している。歯学部駐輪場付近は広島大学移転当時の道路と現在のそれは基本的に変化していない。1970 年代半ばまでは看護婦養成棟として旧広島陸軍兵器補給廠の施設が利用されている。この建物は 1921 年の配置図では第 13 兵器庫、1936 年の配置図では枌料庫とされている建物に該当するものと考えられる。今回検出した石組排水路はこの施設の北側に設置されたものと想定される。この想定が正しいとすれば、近接して建物基礎が残されている可能性が高い。

引用文献

藤野次史　2013 「開発に伴う協議と立会・試掘調査の概要（2010 年）」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第 5 号、53 ～ 131 頁。